

こう しん とう
庚 申 塔

60日に1回めぐってくる^{かのえさる}庚申の日の夜に、近所の人たちが集まって開く講(神仏を祀り、参詣するための集団)^{こうしんこう}を庚申講とといいます。

人間の体内にいる^{さんし}三尸という虫が、庚申の晩に眠った人間の体から抜け出し、天の神である天帝にその人の罪や過ちを告げるため、天帝はその罪過に応じて人の寿命を縮めるといわれています。

そのため庚申講では、庚申の夜に眠らずに語りあかし、長生きを祈りました。もとは中国の^{どうきょう}道教の教えに由来するといわれます。これに仏教や神道の信仰なども加わって、室町時代ごろから各地で行われるようになりました。

こうした庚申講の人々によって建てられたのが、庚申塔(庚申^{くようとう}供養塔)です。

はじめは^{いたび}板碑が多くつくられました。江戸時代に入ると阿弥陀如来、地蔵菩薩、^{さるたひこのおおかみ}猿田彦大神などの像を刻んだものや、それを文字であらわした文字塔が作られるようになります。

江戸時代中期、次第に^{しょうめんこんごう}青面金剛を本尊とするものが増え、以降主流となっていきました。

青面金剛は、その名のとおり青い顔をしろ^{ろっびさんがん}ろっびさん^{ふんぬそう}の六臂三眼の忿怒相の金剛神で、病魔や病魔を払い除くと信じられています。



寛文4年の銘をもつ法龍寺(船堀)の
 青面金剛像庚申塔
 (区指定登録有形民俗文化財)

このように、種類や形の変化に富んでいるのが庚申塔の特色で、地域によって差があります。

江戸川区の庚申塔

江戸川区には、約140基の庚申塔があります。最も古いのは北小岩八幡神社の万治元年(1658)の銘をもつ地蔵菩薩像まんじです。以後は毎年のようにどこかの村で建てられ、天保年間(1830～1843)ごろまでに110基ほどが建てられました。

古い時代のものは、やはり阿弥陀如来や地蔵菩薩が中心です。また青面金剛像の最も古いものは、東小松川の源法寺の寛文3年(1663)のものになります。

青面金剛像は、時代が新しくなるにつれて写実性に富み、装飾も派手になってきますが、区内のものも同様の傾向を見せています。多くは下部に「みざる・きかざる・いわざる」の三猿を刻み、左右に鶏、上部に建立した日月を刻んでいます。

庚申講の人々は庚申塔を建てることによって、無病息災と延命長寿を祈りました。悪魔を退治してくれるという青面金剛に、その祈りを託したのかもしれませんが。



左：宝林寺(北小岩)の文字塔(文化元年)
右：寛文10年の銘をもつ地蔵菩薩庚申塔
(区指定有形民俗文化財)



寛文3年の銘をもつ源法寺(東小松川)
の青面金剛像庚申塔
(区指定有名民俗文化財)